

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520100

研究課題名(和文) 死の欲動理論の新展開——脳機能画像研究に基づく身体表象と情動理論の接続の試み

研究課題名(英文) Die Entwicklung der Affekttheorie

研究代表者

中村 靖子 (Nakamura, Yasuko)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：70262483

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：フロイトの<死の欲動>理論については、主にはドイツ語圏における情動論の展開を追い、これを、情動理論の系譜の中で、高度に抽象化され結晶化されたものとして位置づけた。さらには「無意識の発生」という発生学的な観点の中でそもそもいかにして人類は「ポエジー」という次元を獲得し得たかという問題設定のもと、改めて情動について考察し、これを「ポエジーの成立」という現象から捕らえ直した。これらを総括する仕方で、文学作品をそれが生まれた時代の「ドキュメント」として捉え、『「妻殺し」の夢を見る夫たち』(2013)として出版した。

研究成果の概要(英文)：Concerning the theory of Freud <death drive>, this study put it into the genealogy of Affekt-theory before and after Freud, mainly in German-speaking and reference the French-speaking psychoanalytic school. I followed the deployment of emotion-theory. By Freud the thought of Affekt has been crystallized at the highest level of abstraction. From the embryological point of "the occurrence of unconscious", I considered the development of Affekt-theory further. On the other hand, based on the thought that captured the era in which it was born literary works as "document" of the human emotions very realistic according to the human sense of each era and world that are portrayed in there, I published a book "dream husbands of 'killing wife'" (2013).

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：情動理論 死の欲動論 無意識 ドイツ文学

1. 研究開始当初の背景

フロイトの精神分析理論を西欧の思想的文脈の中で捉え直そうとする試みについては、先行するものに H. F. Ellenberger の *The Discovery of the Unconscious* (1970) があるが、これは力動精神医学の立場から、生体磁気説の系譜の中でフロイトの精神分析理論を位置づけるものだった。「無意識の発見」という鍵語はこの後、精神分析理論の思想的研究へと引き継がれたが、ヒステリー研究以前のフロイトの思索を充分顧慮したものとは言えなかった。1990年代以降、神経画像を用いた脳機能研究が飛躍的に進歩する中で、フロイトの神経学的研究について見直しの気運が高まる一方で、二十世紀後半の心理学の傾向についてはこれが「生物学なき心理学」であり、心のコンピューター・モデルが、心における生物学の決定的役割を無視しているという批判も起こってきた(Gerald M. Edelman: *Bright Air, Brilliant Fire, on the Matter of the Mind* (1992))。こうした中で、本研究は、ヒステリー研究以前のフロイトの神経学的功績に着目しつつ、これを再評価するところから出発した。

2. 研究の目的

フロイトの最初の著作である神経学的論考『失語症の理解にむけて』(1891)は、当時の技術の限界に直面して、精神分析へと舵を切る分岐点となったという見方があるが、しかしフロイトは、技術的限界のためだけに、神経科学から離れていったのではないことは、フロイトの失語症研究が、全面的な局在論を否定していることからも充分うかがえる。失語症についての研究はフロイトをして、そもそも人間はいかにして言語を得たのか、言語を駆使すると言うことはどういうことなのかについて考察を深めていく中で、言語分析へと舵を切ったのである。ル・ドゥーの研究(J. Le Douarin: *The Emotional Brain—The Mysterious Underpinnings of Emotional Life* (1996))は、フロイトの失語症研究以後100年間の神経科学の進化を踏まえて<情動の脳科学>を提唱するものといえる。こうした状況を踏まえて、本研究は、<死の欲動理論>の射程の可能性を改めて検証しようとするものである。

3. 研究の方法

ロンドンのフロイト博物館附属の文書館などにおける資料収集と平行して、収集した文献に基づいて作業仮説を検討した。その基礎となるのは、1994年ダマシオによって提唱されたソマティック・マーカー仮説である。フロイトの失語症研究の論理的基盤となったのは解剖学的知見に基づいた、脳内における身体表象のメカニズムに関するフロイト独自の考察であったが、いかにして脳内に身体表象が形成されるかが重要であるのは、身体の統一感を構成する能力が、自己構造のあり

方に深く関わると見なされているからである。脳内における身体表象については、今日、島(とう)という脳の部位が担う役割とされるが、この部位は、生体のリズムを刻む機能ゆえに「時間の知覚の起源」となっていると主張されている(A. D. Craig: *How do you feel--now? The anterior insula and human awareness*. 2009)。身体表象のメカニズムと時間の知覚の起源との相関についての考察に基づいて、脳内における自己構造の把握のための仮説を模索した。

4. 研究成果

機能論だけではヒステリー症状が何故起こるのかは説明できないと同様に、精神物理学における力動的世界観によっては、主体が見ている風景に何故焦点化が生じるかまでは説明できない。既に申請者は、コンディヤックに始まる言語起源論争からフロイトの失語症研究に至るまでの思想史的、神経学的系譜を明らかにしたが(『フロイトという症例』松籟社、2011年)、デリダは、焦点化の起こり方を「欲望」から説明した最初の論考としてコンディヤックの『人間認識起源論』(1746)を紹介している(*Precede de L'archeologie du frivole*. 1973)。こうした点を踏まえつつ、改めてゲーテの自然研究、とりわけ形態学の構想に着想を得て、ドイツ・ロマン派に大きな影響を与えたとされるダニエル・シューベルトの論考を手がかりにしつつ、情動理論の系譜を文献学的に検証したのが「無意識の発生」(中村、2013)であり、"Die Ethologie des "Affekts" --- Von Spinoza bis Freud", (Nakamura, 2013)である。

フロイトは、生物学的知見からすれば有機体は、「進化」を望んで受け入れたとは言えず、環境からの刺激に対応する中で否応なく進化を遂げながらも、原状復帰を目指すのだと考えた(『快感原理の彼岸』(1920))。そこから構想される自我と無意識とエスの関係図(『自我とエス』(1923)、左図)は、マイネルトが構想した脳構造をモデルにしている。生体は、外界に接した表面を外界に応じて変形させそこに自我を形成しながら、その奥底には徹底した原状復帰を目指す衝動、即ち<死の欲動>を宿している。しかしその生体は、幾層もの階層構造を成しており、また身体自体が、いくつものシステムの組み合わせによって構成されるものである。ダマシオによれば情動とは脳内にモニターされマッピングされた身体反応にほかならない。この反応が、原因となった対象と共に表象されたときに感情が体験されるのである。

既に感情は、動物が進化史の過程で、水中から陸上に進出したことに伴って発達したと見なされている(Cabanac, 1999; Cabanac, Cabanac, & Parent, 2009, 大平、2010b)。そのような感情の重要な機能のひ

とつは、複雑で多次元的な情報を低次元化することで単純化し、迅速な意思決定を可能にすると共に行動を制御することである (Damasio, 1994)。つまり感情やそれに伴う身体的反応は、葛藤が大きく選択が困難な状況下において、我々の自覚的理性的判断に先立って、一つの実行へと我々を促す働きがあるのである。

こうしたソマティック・マーカー説を批判的に継承しつつ、なぜ身体は、意思決定に影響しなくてはならないのかと、逆に問い返すことによって、ソマティック・マーカー仮説を補完する問題点が浮かび上がってくる。身体的反応は、意思決定に際して働く功利的計算に、「ノイズ」を持ち込む。それによって、よい選択肢と悪い選択肢とを判断する基準を複層化し、選択の結果の見込みの中に、広い射程を取り込むことができるようにするのである(大平(5)、2014)。

そもそも身体的反応は、意思決定とは無関連な要因によっても生じうるのであり、意思決定に関連した反応とそうでない反応とを弁別する機能が、身体内部に必要となる。そこから、「内受容感覚」という指標を導入し、内受容感覚を用いた意思決定の自己主体感のメカニズムについて考察を深めたのが、論考「島の機能と自己感」である(大平(4)、2014)。逆に、意思決定に関連するが、外的にはすぐにそれが形にあらわれない場合、たとえば頭の中で考えただけで、すぐには行動を伴わない意思決定の場合、それを決めたのは自分なのだという実感を持ちうるためには、行動レベルにはあらわれない形で、自己主体感が必要となる。その点においても内受容感覚の機能が重要性を持つてくるのだが、内受容感覚は、行動を伴わない意思決定に際しても、自己主体感を作り出す基盤となっているのである。この点からも、意思決定において身体的反応は、やはり影響を与えているのであり、それが自己主体感、自己統一感と結びつくものであるため、脳内における身体表象のあり方は決定的に重要なのである。

脳内における身体表象は、島という部位において担われており、そこではいわば「身体的現在」(Craig, 2009)が表象されているが、この同じ部位が、時間知覚の起源(Craig, 2009)と見なされていることから、自己の過去、現在、未来を表象するという機能との関連において、島の機能は、改めて重要性を帯びてくる。これらについては、「感情・身体・意思決定」(大平、2014、『心理学評論』Vol.57, No.1. 印刷中)において明らかにした。

こうした神経科学における知見に基づいて、これらを参照しつつ、文学作品はそれが生まれた時代の人間観、世界観、また感情の抱き方自覚の仕方、処理の仕方などを優れて表現したドキュメントであると捉え、ドイツ・ロマン派以降の文学作品を論じた

のが『「妻殺し」の夢を見る夫たち—ドイツ・ロマン派以降の<死の欲動>の生態学』(2013)である。また、フロイトの情動理論を、抽象化という精神性の進化のプロセスとして捉えてフロイトの記憶論「潜伏理論」と関連づけて論じたのが「物語と虚構—フロイトのモーセ論」(中村、2013、2014)である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 24 件)

- (1) 中村靖子: 論文「物語と虚構—フロイトのモーセ論」, 名古屋大学文学研究科公開シンポジウム報告書『虚構とは何か—ありそうでなさそうで、やっぱりあるものの形而上学』(中村靖子編) 2014年3月発行、7-18. (査読無)
- (2) 中村靖子: 論文「証拠不十分につき、無罪」マックス・フリッシュ『青髭』における「妻殺しの夢」のあと、『名古屋大学文学部研究集』(査読有) 60, pp.51-84, 2014年3月.
- (3) Matsunaga, M., Isowa, T., Yamakawa, K., Fukuyama, S., Shinoda, J., Yamada, J., & Ohira, H. Genetic variations in the human cannabinoid receptor gene are associated with happiness, Plos One 9, 2014, e93771. (査読有)
- (4) 大平英樹: 「島の機能と自己感」, BRAIN and NERVE 66, 2014年4月, 417-426. (査読有)
- (5) 大平英樹: 「意思決定と島の機能」, 『神経心理学』30巻No.1, 2014年3月, 11-18. (査読有)
- (6) 中村靖子: 論文: 「ポエジーの成立」, 『思想』1068号, 2013, 97-124頁, (単著、招待論文)
- (7) 中村靖子: 論文: Die Ethologie des "Affekts" --- Von Spinoza bis Freud, Yasuko, Nakamura, Journal of the School of Letters 9, S.33-45. (単著、査読有)
- (8) 大平英樹: 「慢性ストレスと意思決定」, 『ストレス科学研究』Vol.28, 2013, 8-15. (査読有)
- (9) Matsunaga, M., Isowa, T., Yamakawa, K., & Ohira, H., Association between the serotonin transporter polymorphism (5HTTLPR) and subjective happiness level in Japanese adults, Psychology of Well-Being: Theory, Research and Practice 3, 2013, 1-6. (査読有)
- (10) Iida, S., Tanabe, H. C., Nakao, T., & Ohira, H., Modulation of emotion by cognitive activity, Psychological Topics 22, 2013, 205-219. (査読有)
- (11) Matsunaga, M., Bai, Y., Yamakawa, K., Toyama, A., Kashiwagi, M., Fukuda, K., Oshida, A., Sanada, K., Fukuyama, S., Shinoda, J., Yamada, J., Sadato, N., & Ohira, H., Brain-Immune Interaction Accompanying Odor-Evoked Autobi

ographic Memory, Plos One 8, 2013, e72523. (査読有)

(12) 論文: Ohira H, Matsunaga M, Murakami H, Osumi T, Fukuyama S, Shinoda J, Yamada J. Neural mechanisms mediating association of sympathetic activity and exploration in decision-making. *Neuroscience* 2013, 246: 362-374. (査読有)

(13) 論文: Ohira H, Osumi T, Matsunaga M, Yamakawa K. Pro-inflammatory cytokine predicts reduced rejection of unfair financial offers. *Neuroendocrinology Letters* 2013, 34: 47-51. (査読有)

(14) 論文: Ohira H. Brain functions modulating redistribution of natural killer cells accompanying cognitive appraisal of acute stress. In P. A. Hall (Ed.), *Social Neuroscience and Public Health*. 2013, pp. 179-192. Springer, New York. (査読有)

(15) 中村靖子: 論文: 「汝、偶像をつくるなかれ」 - フリッシュの掌編「ストーリー」に関する情動の生態学的考察. 中村靖子, 『名古屋大学文学部研究論集』(査読有) 58, pp.25-67, 2012

(16) 論文: Osumi T, Nakao T, Kasuya Y, Shinoda J, Yamada J, Ohira H. Amygdala dysfunction attenuates frustration-induced aggression in psychopathic individuals in a non-criminal population. *Journal of Affective Disorders* 2012, 142: 331-338. (査読有)

(17) 論文: Iida S, Nakao T, Ohira H. Prior cognitive activity implicitly modulates subsequent emotional responses to subliminally presented emotional stimuli. *Cognitive, Affective, & Behavioral Neuroscience* 2012, 12: 337-345. (査読有)

(18) 論文: Murakami H, Nakao T, Matsunaga M, Kasuya Y, Shinoda J, Yamada J, Ohira H. The structure of mindful brain. *PLoS One*. 2012; 7(9): e46377. (査読有)

(19) 論文: Psychological and physiological responses to odor-evoked autobiographic memory. Matsunaga M, Isowa T, Yamakawa K, Kawanishi Y, Tsuboi H, Kaneko H, Sadato N, Oshida A, Katayama A, Kashiwagi M, Ohira H, *Neuro Endocrinol Lett*, 査読有 32, pp.774-80, 2011

(20) 論文: Ohira H, Matsunaga M, Kimura K, Murakami H, Osumi T, (9人・1番目) Chronic stress modulates neural and cardiovascular responses during reversal learning. *Neuroscience*. 2011 193: 193-204. (査読有)

(21) 論文: Ohira H. Beneficial roles of emotion in decision making: functional association of brain and body. *Psychological Topics*. 20 (3), 2011: 381-392. (査読有)

(22) 論文: Ohira H. Modulation of stress reactivity in brain and body by serotonin transporter promoter polymorphism. *Japanese Psychological Research*. 53(2), 2011: 193-210. (査読有)

(23) 論文: Ohira H. Functional association between the brain and physiological responses

accompanying negative and positive emotions and its regulation by genetic factors. In M. Inoue-Murayama et al. (Eds.), *From Genes to Animal Behavior*. 2011, pp. 367-387. Springer, Tokyo. (査読有)

(24) 論文: Ichikawa N, *Siegle GJ, Jones NP, Kamishima K, Thompson WK, Gross JJ, Ohira H. Feeling bad about screwing up: emotion regulation and action monitoring in the anterior cingulate cortex. *Cogn Affect Behav Neurosci*. 2011, 11(3): 354-71. (査読有)

〔学会発表〕(計 6 件)

(1) Ohira, H.: Influences of socioeconomic status on functional brain-body association in decision-making, Annual Meeting of American Psychosomatic Society, 13 March 2014, San Francisco

(2) 大平英樹: 「感情的意思決定に伴う脳と身体の機能的相関」、日本情報処理学会第 156 回ヒューマンコンピュータインタラクション研究発表会、平成 26 年 1 月 15 日、下呂市(招待)

(3) 大平英樹: 「ストレスと認知機能: 脳と身体の機能的相関 ストレスによる意思決定の変容」、日本ストレス学会、平成 25 年 11 月 9 日、徳島大学(招待)

(4) Ohira, H.: Neural mechanisms mediating association of sympathetic activity and exploration in affective decision-making, Annual Meeting of Society for Psychophysiological Research, 2 October 2013, Florence, Italy.

(5) 大平英樹: 「意思決定と島の機能」、日本神経心理学会、平成 25 年 9 月 12 日、札幌コンベンションセンター(招待)

(6) Ohira, H.: Neural mechanisms mediating association of sympathetic activity and exploration in affective decision-making, Annual Meeting of International Society for Research on Emotion, 3 August 2013, Berkeley.

〔図書〕(計 3 件)

(1) 大平英樹(共著)『経済学に脳と心は必要か?』、河出書房新社、2013 年、(執筆部分) pp.059-083.

(2) 単著: 『「妻殺し」の夢を見る夫たち—ドイツ・ロマン派から辿る<死の欲動>の生態学—』、松籟社、総 405 頁、中村靖子、2013 年(平成 24 年度ドイツ語学文学振興会刊行助成による出版)

(3) 小安増生 / 大平英樹(共編著)『ミラーニューロンとこころの理論』新曜社、2011、195-220. (執筆部分)(査読無)

(1)研究代表者

中村 靖子 (NAKAMUR, Yasuko)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：70262483

(2)研究分担者

大平 英樹 (OHIRA, Hideki)

名古屋大学・環境学研究科・教授

研究者番号：90221837